

## 異文化コミュニケーションを積極的に取ろうとする

### 子どもを育てる外国語活動

#### 1. 研究テーマ設定の理由

##### (1) 学校提案とかかわって

学校提案の研究主題は、「学びの質の高まりをめざして～『吟味を生み出す対話』をつくる～」である。外国語活動における学びの質は、外国語を通じて、コミュニケーション能力の素地を拓げることと捉えたい。そのための具体的な姿として「異文化コミュニケーションを積極的に取ろうとする子ども」にした。

新学習指導要領外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」と示されている。つまり、外国語を通じて、「体験的な言語や文化の理解」、「積極的なコミュニケーションをとろうとする態度の育成」、「外国語の音声や基本的表現の慣れ親しみ」の3本柱の学びを子ども達が行うことでコミュニケーション能力の素地を養うことに繋がっていく。したがって、この3本柱も学びの質として考え、それぞれに対して生じてくる課題に向かって吟味を生み出す対話を充実することでコミュニケーション能力の素地を拓げていきたい。本研究では、他言語も触れるが英語に焦点を当てて行う。

学校提案では、学びの質の高まりに迫るため、「自己」「他者」「対象」の3つの対話を提唱している。外国語を通じたコミュニケーション能力の素地を養うために、必然性のあるコミュニケーション活動を設定していくことが必要である。必然性のあるコミュニケーション活動として、異文化コミュニケーション体験を最終的なコミュニケーション活動と設定する。「自己」では、必然性のあるコミュニケーション活動を持たせるためにも交流相手に何を伝え合うのか内容に関して対話する。「他者」との対話では、友達とさらに伝える内容を充実させ、内容を伝える表現手段の工夫を行ったり、交流活動の相手と実際にコミュニケーション活動を行ったりする。「対象」との対話では、外国語である英語への慣れ親しみ、言語以外のコミュニケーションツール（ジェスチャー、表情、絵や写真など）の使用、お互いの文化の気づきや理解などが考えられる。

##### (2) 外国語活動でめざす子ども像

外国語活動では、英語のゲームや歌などを何の目的もなく体験させ、英語に慣れ親しむことができる子どもを目指しているのではない。まず、外国語に限らず、相手のことを思いやって受容できる姿勢をもつことが基本となる。その上で、外国語である英語や言語以外の伝達方法をコミュニケーション活動の中で体験的に使うことで、相手に伝えることができた喜びや相手の伝えたいことが分かって嬉

しいなどと感じられる子どもを目指したい。コミュニケーション活動を行うためには十分に英語の音声や基本的表現に慣れ親しむことが必要である。子ども達は、コミュニケーション活動で使う表現をゲームや歌、クイズなど発達段階に合致した楽しい活動で出会い、副次的に英語の音声や基本的表現に慣れ親しめていけるようにする。英語に限らず、すべての言語に共通する話す声の大きさ、速さ、間合いの取り方などにも意識できるようにする。また、相手の言うことが聞き取れなかったり、理解できないときに使用するコミュニケーション方略（聞き返し、ジェスチャー、表情など）、や図、写真、実物などの提示などにも子ども達の側から気づいていけるように支援していく。

伝えるためには、伝えるための目的を子ども達がしっかりと持つことが大切である。また、誰に伝えるのか伝える相手もはっきりと意識しなくてはならない。コミュニケーション活動を行う相手は、オーストラリアなどの子ども達、京都外国語大学の学生、和歌山大学の留学生や大学生、地域の外国人などを考えている。伝え合う内容は、「英語ノート」と関連させていく。

## 2. 研究の展望

今年度は、英語ノートを活用しながらコミュニケーション活動を各単元で必ず組み入れてコミュニケーション能力の素地を拡げることができるように工夫する。具体的な単元として、「世界の言葉」、「言語以外のコミュニケーション」、「自己紹介」、「数」、「衣装」、「クイズ」、「外来語」、「時間割」、「料理」を取り扱う。これらの単元は、英語ノート1の単元構成に準拠している。

各単元で、子ども達がスムーズにコミュニケーション活動に移っていくことができるために、辻(2009)の英語活動における授業展開プロトタイプを活用していく。具体的には、単元や授業を「ウォームアップ」、「コミュニケーション場面の提示」、「聞くことに慣れる活動」、「発音することに慣れる活動」、「準コミュニケーション活動」、「コミュニケーション活動」、「振り返り」の順序で構成していく。

以上のことを積み重ねることによって、最終的には異文化コミュニケーションを積極的に取ろうとする子どもの姿を追究していきたい。

## 3. 研究の評価

単元ごとに「言語や文化についての体験的な理解」、「積極的なコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」、「外国語の音声や基本的表現への慣れ親しみ」の3点に関する自己評価や自由記述に取り組んでいく。また、研究授業の際には、指導助言をはじめとする他者の意見も参考にしていく。さらに、英語教育を専門とする大学教員からの指導助言も受けていく計画である。

### 参考文献

辻伸幸(2009)「小学校英語活動における授業展開のプロトタイプ開発」  
『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第59集 pp125-130